

国立大学法人A大学附属高等学校1期生の実像

— アンケート結果に見る附属高校への進学動機と大学進学 —

井上 敏 憲

(愛媛大学 教育・学生支援機構)

A Portrait of the Inaugural Class of a University-affiliated High School

— What they had expected and what they have got —

Toshinori INOUE

(Institute for Education and Student Support, Ehime University)

1. はじめに

附属又は系列の高等学校を有する私立大学では、当該高等学校の卒業見込者に対し、特別な入試制度を設けることが多い。特に大都市圏では、この制度を当てにして小中高等学校を選ぶケースが少なくないことは、いわゆるエスカレーター式、内部進学という言葉とともに広く知られている。これに対して、国立大学では、高等学校を設置する国立大学法人が少数であることに加え、特定高校の出身者のみを対象とする入試制度は好ましくないと認識されてきたために、特別な制度による内部進学という概念は乏しい¹⁾。

国立大学法人A大学は平成20年4月に、農学部附属農業高等学校をA大学附属高等学校に改組した。その前後を通じて、A大学では附属高校出身者のみを対象とする入試は一切実施していない。この意味でA大学と附属高校の間にはいわゆる内部進学の制度は存在しない。一方で、A大学と附属高校は高大連携教育を充実させる方針を打ち出し、附属高校の生徒募集においても、この点を強くアピールしている²⁾。A大学としても、高大連携により各学部・学科等の履修内容を十分理解して、学びへの意欲が高められた人物が附属高校で育成され、進学を希望するならば入学者選抜において大きなプラスとなる。

本稿では改組後の附属高校1期生へのアンケート調査をもとにして、彼らが附属高校に進学した動機やA大学への進学希望等を概観する。その上で、附属高校からA大学への接続について検討する。

2. 国立大学法人A大学附属高等学校の概要

母体となった農業高校の歴史は明治時代にまで遡ることができる。県立の時代を経て、昭和31年からA大学農学部附属となった。平成7年には農業系の4学科を廃止し、総合学科を設置した。これにより、農業高校でありながら、設置学科は総合学科のみとなった。平成20年度には、前述のとおり、A大学附属高等学校に改組された。総合学科であることは変わらないが、カリキュラムは大きく変更された。また、1学年の定員は昭和51年以降、120名である。

現在は、2年次以降、5つの系列が設定されている。理工学系列、社会・文化学系列などのように大学進学希望者に対応したもののほか、農業高校時代からの伝統により、農業生産学系列や環境学系列が充実している。

大学とは高大連携委員会を組織し、3ヶ年に渡って体系的に、課題を発見し、追求できるような高大連携プログラムを実施している。主なものを表1に示す。1年次では、各学部で行われている教育・研究の一端を伝える授業や、地域理解を深める³⁾などの目的でA県の自然、文化、産業等に関する講義を大学教員が担当する。2年次では、「日本語リテラシー」、「キャリア学習」、「応用科学研究」を主に大学教員が担当する。3年次では、「フリーサブジェクト」として大学の共通教育科目を大学生とともに受講し、「課題研究」では大学教員から継続的に指導を受ける⁴⁾。

表1 附属高校における主な高大連携科目

実施年次	科目名	内 容	時期	回数・日数
1年	産業社会と人間	特定のテーマによる講義（各学部教員が担当）	前期	7回
		基礎科学実験（実験実習教育センターが担当）		4日
		キャンパス IT 体験授業（総合情報メディアセンターが担当）		1日
	産業科学基礎	A県の自然、文化、歴史、産業、医療等（大学教員が担当）	後期	14回
		科学技術と情報、国際社会と地域（大学教員が担当）		
2年	キャリアプランニング	日本語リテラシー（大学教員が担当）	前期	8回
		キャリア学習（大学教員等が担当）		4回
		応用科学探究（大学教員等が担当）		8日
	環境教育学	地球環境、生物環境、環境倫理等（大学教員が担当）	後期	12回
3年	フリーサブジェクト	共通教育科目（教養科目）を受講	前期	15回
	課題研究	大学教員が継続的に指導	通年	週2時間

3. 卒業時アンケートの実施とその結果

附属高校の協力を得て、平成23年2月25日から28日にかけて、全卒業予定者を対象に進学先決定の時期やプロセス、高大連携プログラムの影響等を調査する目的でアンケートを実施した。各教室でホームルーム担任等が質問票を配布し、回答終了直後に回収した。125人の卒業予定者中、88パーセントにあたる110人から回答を得た。

対象者には、卒業式直前の慌ただしいホームルーム活動等の時間を割いて回答を求めることとなった。そのため、質問項目を絞ったり、選択肢数を少なくしたりするなどして、5分程度で回答できるものとした。

主な質問と、集計結果は次のとおりである。

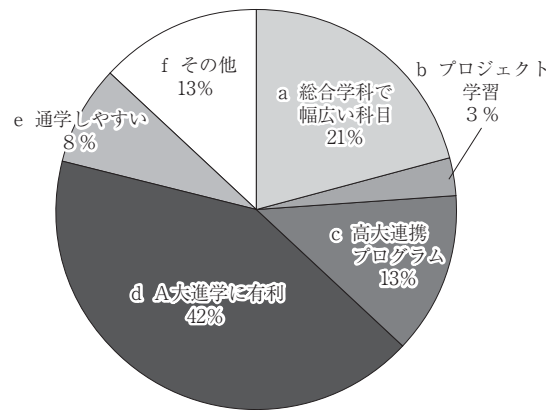


図1 附属高校を選んだ最大の理由

3.1 附属高校への進学理由

A大学附属高校への進学を決めた最大の理由として想定される次のaからfを提示し、1つを選択させた。

- a 総合学科なので幅広い科目を選択して学ぶことができるから
- b プロジェクト学習などの教育方法が魅力的だったから
- c 高大連携プログラムを受けられるから
- d A大学の進学に有利だと思ったから
- e 自宅から通学しやすいから
- f その他

有効回答103件の集計結果を図1に示す。選択肢dが4割強を占め、A大学進学への期待が大きかったことがわかる。選択肢cも大学の附属高校であることで実現されるため、これらを合わせた過半数はA大学の附属高校であることを最大の理由として、この高校への進学を決定したことになる。

3.2 高大連携プログラムの有益性

まず各学年で経験した高大連携プログラムが有益であったかどうかを尋ねた。詳細は省くが、図2に示すとおり、年次を追うごとに有益であるという回答が増えている。しかし、否定的な回答も少なくなく、3年次の取り組みに対してさえ、2割の生徒は有益であったと感じていない⁵⁾。

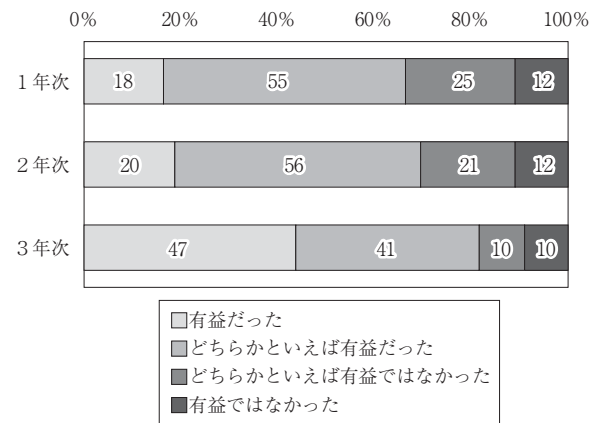


図2 高大連携プログラムの有益性の評価

次に、高大連携プログラムはどのような点で有益であったかを訊いた。次の4つの選択肢を示し、該当するものを全て選択させた。

- a 専門的な知識や技能が身に付いた。
- b 学問の魅力や勉強の面白さに気付いた。
- c 勉強の仕方や研究を進める方法がよくわかるようになった。
- d 高校卒業後の進路選択に役立った。

結果を図3に掲げる。全体として、いずれの選択肢も選択率が低い。例えば、選択肢aは約5割の生徒が選択したに過ぎない。これは、多くの高大連携プログラムが専門性の高い知識や技能を提供するものであることを考慮するならば、もっと選ばれることが期待される。各授業の受講直後であれば、専門的な知識や技能が身についたと感じていても、今回のように一定期間経過後に質問すると、記憶が薄れ、肯定的回答が少なくなるということであろうか。ただ、図2で示したように、高大連携プログラムに有益性を見いだしていない生徒が一定数いるという現実からは、いずれの選択肢も8割を超えて選択されることは期待できないであろう。

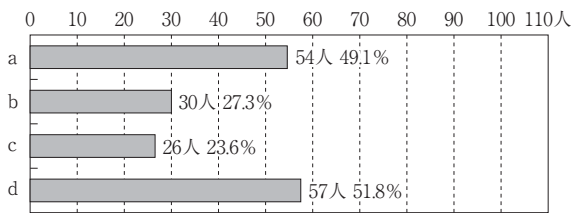


図3 高大連携プログラムのメリット

3.3 「課題研究」と希望学部・学科等の関連

「課題研究」は附属高校の授業科目であるが、各生徒に大学教員が割り当てられ、生徒は大学で継続的な指導を受けた。この「課題研究」と各生徒が大学等で学ぼうとしていることに関連があるかどうかを尋ねたところ、図4に示すように、7割の生徒が関連があると答えている。これらの生徒にとっての「課題研究」は大学における専門教育の導入となりうるもので、高大連携による効果は大学入学後にも期待できる。

一方、「ほとんど関連がない」とした生徒は4分の1である。これはA大学では学べない分野の学部・学科及び専門学校への進学者が存在するため、大きすぎる数値とは言えない。また、「課題研究」で選んだテーマやその関連分野に適性がないことを見出して、他の分野に進学するような場合は、いわゆる入学後のミスマッチが事前に阻止されたとも言える。つまり、この数値には小さいほど好ましいとは言えない側面もあり、解釈が難しい。

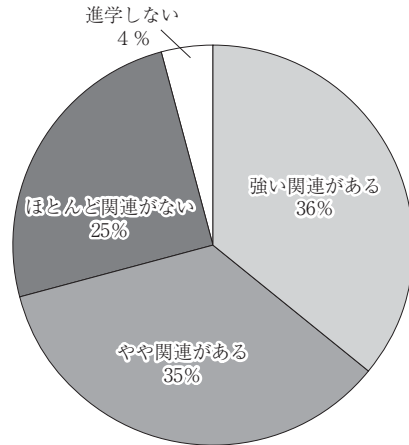


図4 「課題研究」と大学等での専攻分野との関連

3.4 A大学へ出願した生徒への質問

A大学への出願の有無を聞いたところ、実人数では合わせて88人が出願していた。これはちょうど回答者の8割に当たる。入試方法別の出願者数は、前期日程に19人、後期日程に17人、AO・推薦入試に83人である。

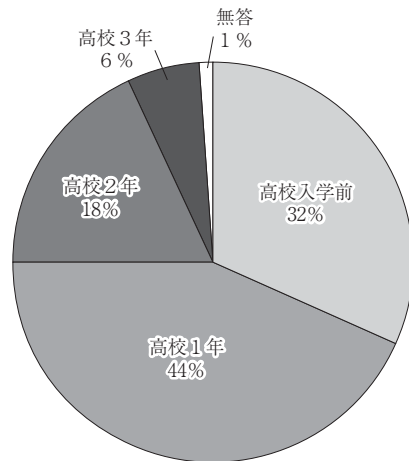


図5 A大学受験を考え始めた時期

これらの出願者を対象に、まずA大学を受験しようと考え始めた時期を質問した。その結果を図5に示す。出願者中、4分の3は高校1年が終わるまでにA大学の受験を検討し始めている。また、3割強にとっては、A大学は高校入学前に進学先として意識されていることがわかる。

続いて、A大学受験を決意した時期を質問した。進学しようとする大学の最終決定は高校3年となることが多いとされているので⁶⁾、高校3年の1年間のみは期間を3つに区切って選択肢を用意したが、その必要はなかった。結果を図6に示す。出願シーズンが早いAO入試や推薦入試の出願者が多いことから、高校3年の夏休みまでにはほとんどの生徒が出願先を決めていると見られる。実人数では38人(全回答者中の35%、A大学出願者中の44%)が高校2年になる前にA大学への出願を決定しているわけであ

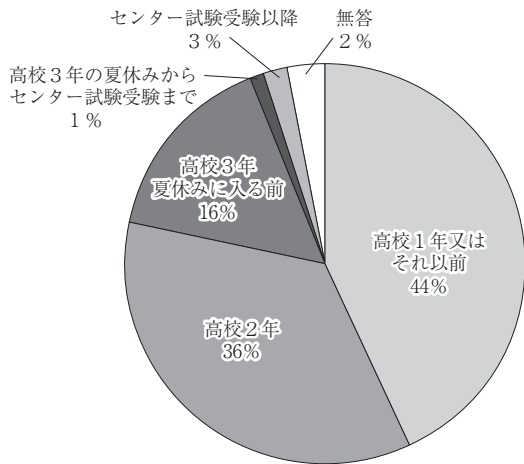


図6 A大学受験を決定した時期

り、志望大学を早期に決定する傾向は顕しい。

このように志望大学の決定が早いなら、大学で専攻しようとする分野への理解が追いつかないままに、まずはA大学への進学を決め、その後、学部・学科等を決定する生徒が多いことが推定される。これを裏付けるのが次の質問である。

「学部・学科等の決定」と「A大学を受験することの決定」の順序を尋ねたところ、図7に示すとおり、学部・学科等の決定よりもA大学の受験を先に決意する生徒が多いことがわかった。この場合、A大学が提供できない分野の学士課程には目を向けられない可能性があるが、A大学は6学部を擁する総合大学であるため、この点では特に問題はないであろう。

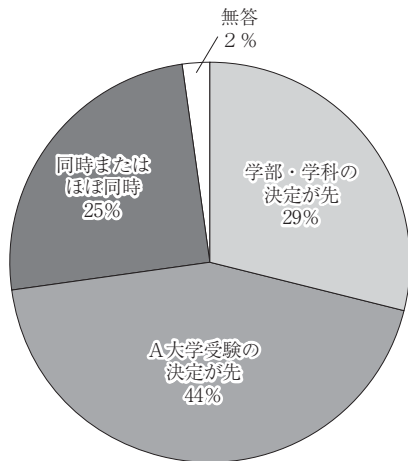


図7 A大学受験の決定と学部等の決定の順序

一般には、受験する大学を先に決めてしまうと、「合格できるなら何学部でもよい」と考える受験生が出るのが考えられる⁷⁾。その場合、本人の適性や興味関心よりも、より合格可能性が高い入試単位が選ばれ、いわゆるミスマッチの危険が増す恐れもある。同校では、充実した高大連携プログラムにより、このような事態は起こりにくいものの、現に見られる志望学部の偏り⁸⁾と何らかの関係があ

る可能性は残る。

対象をA大学の出願者に絞った質問の最後として、A大学へ出願した理由を尋ねた。想定される理由として次の5個⁹⁾を示し、最大2個まで選択してもらった。

- a 自宅から通える地元の大学だから
- b 高大連携プログラムなどにより、A大学の教育・研究内容がよくわかったから
- c 附属高校で学んだことを生かせる入試方法だったから
- d 合格する可能性が高いと思ったから
- e 家族や先生の勧めがあったから

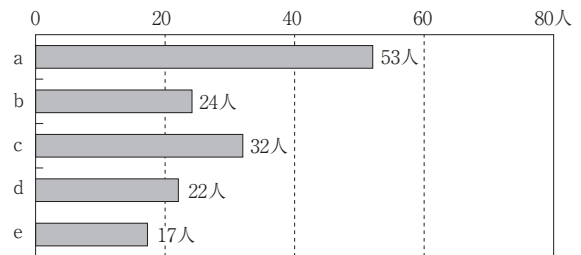


図8 A大学へ出願した理由

集計結果は図8のとおりである。実数で53人（A大学出願者中、60%）にとっては、地元位置する大学であることが主要な進学動機になっている¹⁰⁾。このうち、地元志向が非常に強いとみられる生徒、すなわち、選択肢は2個まで選べるのが指示されているにも拘らず、選択肢aのみを挙げた生徒は16人¹¹⁾であった。また、主体性の欠如が疑われるeのみの選択者は3人、aとeの選択者は7人であった。

高大連携の成果に直結する選択肢b及びその成果に関連すると見られる選択肢cの選択者は多いとは言えない。この結果は、高校2年を終えるまでにA大学の受験を決意した生徒が出願者の8割（図6）であることや、志望大学をA大学に決めた後で学部等を検討する生徒が4割強（図7）であることと整合性がある。

3.5 A大学に出願しなかった生徒への質問

全回答者中、A大学に出願しなかった22人にはその理由を質問した。この中には、大学等への進学を希望しない生徒11人¹²⁾が含まれているので、進学希望者でA大学に出願しなかったのはわずか11人ということになる。少人数のため、詳細は述べないが、A大学に出願しなかった理由として、「A大学には合格できそうになかったから」又は「推薦・AO入試の出願要件に合わなかったから」を挙げた回答者は皆無であったことは指摘したい。

また、この22人には、高校入学後、A大学への進学を考えていた時期があったかどうかについても選択式で質問し

た。当該設問に回答しなかった1人を除いた21人中、「考えていた時期はない」としたのは4人である。これ以外の17人については、低学年ではA大学進学が視野にあったものの、学年の進行とともに、その可能性を自ら排除したという傾向が窺える。

3.6 附属高校に進学したことに対する満足度

アンケートの最後は、進路決定の点で附属高校に進学したことをどう思うかという全員に対する質問で締めくくった。図9が示すように、満足している生徒が多いものの、「不満」と「どちらかといえば不満」という回答（以下、「不満足群」と言う。）を合わせると3割近くある。その理由については自由に記述させた。不満足群の生徒が挙げる主な理由は、「行事が受験勉強には不利」、「A大学に固執してしまい、他の大学に興味を向けられなかった」、「高大連携はよかったが合格できなければ意味がない」、「一般入試で受験する人には向いていない」である。

予想されるように、アンケート実施時点ですでにA大学に合格している55人^{12),13)}の大半は、「満足」又は「どちらかという満足」（以下、「満足群」と言う。）している。「どちらかという不満」は6人で、「不満」は1人もいない。

一方、A大学のAO入試又は推薦入試で不合格になった生徒30人^{12),14)}について見てみると、満足群13人、不満足群14人、無答3人となる。自由記述欄には「高大連携授業を通して、大学で何を学びたいか明確にできた」、「将来の目標ができた」などの回答が見られる。たとえ第一志望¹⁵⁾のA大学に進学できなくとも、進路希望を固めることができたという点から附属高校に学んだ意義を評価している生徒と、期待していたA大学進学が果たせず不満に思う生徒がほぼ同数になったと解釈される。

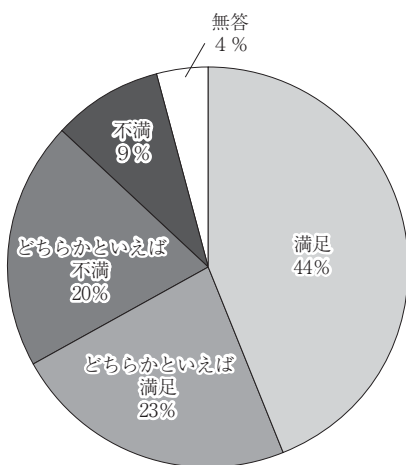


図9 附属高校に進学したことに対する満足度

4. おわりに

A大学附属高校は少なくとも次の2つの点で、全国的に見てもユニークな存在である。

第一に、生徒の圧倒的多数が大学進学希望でありながら、改組の際にも総合学科であることを変えず、農業高校時代からの伝統的な体験学習を重視するなど、いわゆる進学校にありがちな偏差値至上主義からは距離を置いていることが挙げられる。

第二に、本アンケート結果が示すように、進学する大学に関して地元志向が非常に強く、その傾向は高校進学時にも顕著に認められる。これは、3年間の高校生活を経ても変わることがなく、アンケート回答者中8割もの生徒が実際にA大学に出願している。

ここで問題になるのは、A大学附属高校からA大学への接続である。そもそも国立大学の附属として設置されている高校又は中等教育学校が少ない中で、A大学附属高校に類似した国立学校を国内に見出すことはできない。そのためA大学は参考となる先行例を持たないまま、附属高校卒業生の受け入れを検討する必要性に直面したことになる。

典型的な国公立大学の一般入試では、附属高校の特色である体験学習やプロジェクト学習等の成果が生かされず、大学進学実績が振るわない可能性もある。そうなると、附属高校への入学者の質が低下するという悪循環に陥ったり、附属高校がその特長を捨て、受験対策を重視したカリキュラムに移行せざるを得なくなるかもしれない。こうなれば、近隣の公・私立高校と類似した一高校でしかなくなり、大学附属の意義が失われよう。

選択肢の1つとして、私大型の特定高校を対象とする内部進学制度や指定校推薦に類似した制度を導入するという方法がある。しかしながら、公共的性格が濃厚で、公平性の確保が強く求められる国立大学の入試制度において、そのような制度を附属高校の進学希望者数に見合うような規模で導入することに対しては、慎重でなくてはならない。監督官庁に照会するまでもなく、現時点ではそのような土壌が整っているとは思われないからである。事実、A大学は附属学校を特別扱いする入試制度は行っていない。

A大学にとって幸いであったのは、附属高校卒業生の受け入れとは無関係に¹⁶⁾、推薦入試やAO入試の導入計画が進行していたことである。これについては第一期中期計画で、「受験者を多面的に評価し多様な人材を確保するために…新規制度の導入を図る」と明言されている。A大学はこの中期計画に沿って、志願者が高校までに経験した多面的な活動や意欲などを評価指標に加えた新たな入試を導入した。言うまでもなく、これらの入試は附属高校のみを対象としたものではないが、「多面的に評価」すべき「多様な人材」は、附属高校が育てようとする人物像と高い親和性を持ち、結果として、卒業生の半数近くがAO入試又は

推薦入試でA大学に進学することとなった。

高校側からすれば、このような入試改革によって、いわゆる偏差値の足枷が緩められたことになる。つまり、当該入試においては、教科・科目の学力テストで高得点をマークすることが最重要視されるわけではないので、偏差値に過敏になることなく、各校の理念に沿った特色ある教育が可能となる。この意味でA大学に見られるような入試の多様化は、中等教育の改革に資するものとなる。

とは言え、新たな入試によるA大学入学者の活動や学業成績については今後の検証が待たれる。附属高校卒業者に限定するなら、大学としても膨大な資源を投入した高大連携の成果が、大学入学後にどう表れるのかについても注目していきたい。高大連携による諸活動が今後どのように推移しようとも、大学入学の便法に成り下がってはならないのである。

謝 辞

A大学附属高等学校の彦田順也先生と谷口浩一先生には、アンケート内容のチェック、実施、集計で全面的に協力していただいた。ホームルーム担任の先生方にも、調査票の配布や回収等で大変お世話になった。深く感謝申し上げます。

注

- 1) 東京工業大学やお茶の水女子大学では、附属高校出身者のみを対象とする入学者選抜が行われているが、いずれも高大連携教育の構築に係る研究の一環と位置付けられている。これについては下の「文献等」で示すURLを参照されたい。
- 2) 附属高校はその教育理念として、学びに対する高いモチベーション、地域を担う意欲等をA大学と連携して培うことを謳っている。また、附属高校の生徒募集用のパンフレットでは、「高大連携プログラムでは…大学の教員による最先端の研究に触れながら、自ら課題を見つけ解決することを目的として授業を行う」とされている。
- 3) A大学憲章では、地域に貢献する人材の養成が大学の主要な責務であるとされている。
- 4) 「課題研究」は2期生以降、2年次後期から開始することとなった。
- 5) 附属高校が同時期に実施した別のアンケート結果と整合性がある。例えば、高大連携プログラムを通じた課題発見能力や課題解決能力の獲得については、2割の生徒が否定的な回答をしている。
- 6) 例えば、進研アドの同時期の調査では、高校3年の春以降に第一志望校を決定する受験生が多いことが示されている。下記「文献等」に掲げる同社の情報誌 *Between* に詳しい。
- 7) 私立大学では複数学部へ出願する場合は受験料を割り引く例もよく知られている。複数学部への同時出願は当然視されていると考えられる。
- 8) 入学定員が500名のB学部への志願者は、170名のC学部の

半分に満たない。

- 9) A大学が全入学者を対象として実施する新入生アンケートでは、さらに多くの選択肢を設けている。附属高校卒業予定者向けの本アンケートでは、附属高校の特徴を反映した選択肢としている。
- 10) 本アンケート結果からは、地元志向に関して男女差は認められない。
- 11) 選択肢bのみを挙げた1名及び選択肢cのみを挙げた3人と比較して格段に多い。
- 12) 高校卒業後の進路に関する別の設問により、この人数を把握した。
- 13) アンケート実施時点では一般入試の可否は発表されていないので、AO入試又は推薦入試による合格者である。
- 14) A大学のAO入試又は推薦入試に出願したと回答した生徒のうち、「A大学に合格している」と答えなかった生徒の数。
- 15) A大学ではAO入試及び推薦入試の合格者が入学を辞退することは原則として認めていないため、これらの入試への出願者はA大学が第一志望であったと理解される。
- 16) 第一期中期計画は平成16年から進行しているのに対して、附属高校の改組の方針が公になったのは平成19年である。

文献等

お茶の水女子大学ホームページ「お茶の水女子大学における附属高校からの高大連携特別入試について」

<http://www.ao.ocha.ac.jp/news/20070831.html>

東京工業大学附属科学技術高等学校ホームページ「科学技術創造立国としての高大連携教育システム及びその効果に関する研究－特別選抜と受け入れ体制について－（東京工業大学教育推進室）」

http://www.hst.titech.ac.jp/coop_edu/index.html

進研アド（2011）「今の高校生の『受験行動』から、2012年度入試を考える」『*Between*』239：13-15